風花（かざはな）のひと

五木寛之

五木寛之
のひと

講談社

昭和五十四年四月十日　第一刷発行
昭和五十四年六月十五日　第三刷発行

七八〇円

発行者――野間省一
印刷所――豊国印刷株式会社
製本所――藤沢製本株式会社

風花のひと

五木寛之

発行所――株式会社　講談社　〒一一二
東京都文京区音羽二丁目一二番二一
電話（大代表）東京（〇三）九四五―一一一一
振替　東京八―三九三〇

©五木寛之　1979　落丁本、乱丁本はお取り替えいたします

0093-306148-2253(0)　（文2）

風花のひと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

信号が青にかわっても、彼はまだ車のブレーキを踏んだままだった。

彼の目はそのとき、何かまぼろしのようなものを見ていた。曇ったガラスをすかして外界を眺めている、そんな感じだった。

彼はぼんやりしていた。たった今、目の前の横断歩道を、しずかに渡っていった女の印象が、あざやかに瞼の裏にのこっている。女はうすい藍色の和服を着ていた。襟から抜き出た首筋の白さが、初夏の街路樹の緑を背景に、いっそう際立って見えた。

彼はその面長な横顔を、以前どこかで見たような気がした。それは錯覚だったかもしれない。たぶん、絵か、写真の中でか、よく似た面ざしのひとを見た記憶が、ふとよみがえってきただけのことだろう。

「どうしたのよ」
隣りに坐っている奈見子の声が、彼を現実に引きもどした。
「信号が見えないの？」
せきたてるようなクラクションの音が背後でおこった。彼はあわててブレーキ・ペダルから足をはなした。アクセルを踏むと、強力なトルクを持つドイツ車は、AT車とは思えぬ敏感な加速で走りだした。
「どっちへ曲る？」
と、彼はきいた。
「左へ――」
奈見子が命令するような口調で言った。
彼は広坂の通りを左折し、兼六園と石川門にはさまれた道路を、他の車をぬって走っていった。
「その辺でとめて」
奈見子が彼の腕に手をふれて言った。
「自分で走ってみるわ」
「いいとも」

彼は車を道路の端にとめ、奈見子と席をかわった。彼女は手慣れた動作でシートの位置を調節し、ミラーの角度をかえた。
「モデルチェンジするたびに計器盤(ダッシュボード)まわりが野暮ったくなるのね。なぜ？」
「流行なんだよ、こういうのが。精悍(せいかん)さを狙ってのデザインなんだろう。しかし、ジェット機のコックピットふうでいいという客もいる。それに機能的にはうんと向上してるし」
「九百万もする車に乗るのは、機能めあてじゃないでしょ。使いやすさだけなら国産車で十分じゃない」
「ご説、ごもっとも」
奈見子はサイド・ブレーキをおろすと、ウインカーをカチカチ鳴らしながらスタートした。彼は奈見子の顔色をうかがうように、
「変速のショックがほとんどないところはさすがだろう？」
「でも発進加速は昔の２０００CSのほうが、まだしもパンチがあるみたい。車体が重くなってパワー・ウェイト・レシオがさがったんじゃないの」
「そんなことはないさ。逆に加速がスムーズすぎるんでスピード感がないような気がするだけだ。ほら――」
と、彼は窓の外を指さして言った。

「見ろよ。実際には、ほかの車をみんな置いてってるじゃないか。排気対策の問題でエンジンの出力が少し落ちてるのはたしかだが、走りこめばもっと調子も出てくるだろうし」
「わかったわ」
奈見子はうなずいた。
「登録の手続きをしてちょうだい。しばらく乗ってみて、どうしても気に入らなかった時には引き取ってね。どうせこのタイプは品不足だって話だし、欲しがってる客がいくらでもいるんでしょ。よそへ回せばそこでもう一度、お小遣いが稼げるじゃない」
「今までに、おれが変な車をきみにすすめたことがあるかね」
「これまでは、なかったみたいだけど」
「おれがただの外車のセールスマンじゃないことは、知ってるはずだぜ」
「ええ。でも、それは過去のことでしょう？　今のあなたが、ただの外車ディーラーの平営業部員だってことは、事実ですもの」
「わかったよ」
「冷いコーヒーが飲みたいわ」
奈見子は午後の街を抜けて、天神橋をわたり、卯辰山の中腹にある白いレストランのほうへ急なS字の坂をギヤをDレンジに入れっぱなしのままのぼっていった。

「まあまあね、この車――」
彼女は純白のＢＭＷ６３３ＣＳＩＡをレストランの横に止めると、キーを指でもてあそびながら、さりげなく彼に言った。
「あなたがさっき見ていた女のひとのこと、教えてあげましょうか」
「なんだって？」
「しらばっくれるんじゃないの」
やや短か目に仕立てたコットン・パンツの裾から、きれいに緊(しま)った足首を見せて、奈見子は階段をのぼっていった。

「冷いコーヒーを二つ」
と、ラウンジのほうの席に腰をおろしながら峯岸裕也(みねぎしゆうや)はウェイトレスに注文した。奈見子は知らん顔をしていた。
「それでいいんだろ」
「クーラーがききすぎてない？　この席」
「じゃあ、カウンターに移ろう」
二人は並んで広いガラス張りの壁面の前に坐った。そこからは金沢の市街がよく見え

た。逆光の中に、初夏の街は白っぽく輝いていた。古い家並みの瓦の波が、ねっとりとした光沢をおびて続いている。あたらしいビルや、兼六園の木立ちや、はるか遠くの日本海の一部も見えた。すぐ目の下には、浅野川の流れが斜めにのびて光っている。

「煙草、ちょうだい」

「ほら」

奈見子は裕也のさし出したラークの袋から一本ぬいてくわえると、彼が火をさし出すのを待つように唇をつき出した。

「親父がね——」

と、奈見子は裕也のジッポーの焰を引きよせながら言った。

「あなたとのこと、そろそろはっきりさせようじゃないか、って」

「ほう」

「うれしくないの？」

「おれたち車のセールスマンは、車を客に売って、代金を受け取った後でも、まだ本当に安心はしないもんなんだよ」

「それは正しいやり方ね」

奈見子は運ばれてきたコーヒーの中の氷を、指でつまみ出して額に押しあてながらうな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ずいた。

「正式に婚約したって、いつだって解消できるんだし、ましてそこまで行ってないわたしたちのことだもん」

「ああ。おれたちは今のところ、ただ、ときどき寝てるってだけの間柄だしな」

「問題は熱意よ」

「熱意？」

「そう。どれくらいあなたがわたしと結婚したがってるかってこと」

「そんなこと判ってるじゃないか。きみと結婚することによって生ずる経済的、社会的、精神的利益と同じくらいの熱意さ」

「なかなか言うじゃないの」

滝村奈見子は、煙草の煙を裕也に吹きかけると、サングラスをはずして髪の上にのせた。素肌にTシャツを着込み、眼鏡をそんなふうにしていると、二十五歳の彼女は少女のように見える。

奈見子は、きれいに陽灼けした肌と、しなやかな長い手脚をもっていた。目鼻立ちはくっきりしていたが、顔は小さかった。彼女には絶えず体の一部をうごかしたり、視線をかえたり、唇を開いたり閉じたりするくせがあった。

奈見子の父親である滝村良造は、そんな娘のことを、木ねずみのようだ、と言っていた。木ねずみとは、栗鼠の別名なのだ。

滝村良造は、北陸一帯だけでなく、中部や関西にもそのチェーンを持つ滝村総業という会社の持主である。滝村総業は、観光、交通、不動産など、さまざまな分野に手をひろげている企業コンツェルンだった。

古い伝統を持つこの街では、とかく白眼視されがちな成り上りの一匹狼的実業家で、その事業の基礎は、かつての朝鮮動乱のころに築かれたと噂されていた。

奈見子は、その滝村良造の一人娘だった。と、いうことは、当然、将来の事業の後継者でもあることになる。

彼女は東京の私立高校を出ると、しばらく美術大学の写真科に籍をおき、やがてニューヨークで一年ほど遊んだあとで金沢へ帰ってきた。外車専門のディーラーの金沢支店でセールスの仕事をしている峯岸裕也と知りあったのは、彼女がその社に英国車を発注したのがきっかけである。

金沢にもどってきた奈見子は、まだ写真の仕事への多少の執着を残していたらしい。だがニューヨークで、すさまじいばかりの才能の競争を見てきた彼女は、プロの写真家としてやって行く意欲をほとんどなくしてしまっていた。ただ、自分のたのしみとして、能登

半島や、白山山系の辺地の撮影行のために、頑丈で安全な車が欲しかったのだろう。

彼女が購入しようとしたのは、レインジ・ローバーの新しいタイプだった。ジープに似て実は段違いな豪華さを持つその車は、本国の工場に直接厄介な注文を出さなければ手に入らない。その担当者として彼女の前に現れたのが、峯岸裕也だったのである。

彼は金沢市近郊の農家の次男だった。中学から高校にかけてはバイクに熱中し、富山の大学に入学すると四輪に転向した。彼は大学の自動車部で山岳ラリーを専門にやった。卒業の前の年、峯岸裕也は全日本山岳ラリーに出場し、幸運と優れたナビゲーターにめぐまれて優勝している。

〈ただの車のセールスマンじゃない〉

というのは、モータリストとしての彼自身のそんな経歴が吐かせた言葉だったのだ。

だが、野球やテニスとちがって、山岳ラリーは、直接金を稼げるスポーツではなかった。登山と同じように、そこには本人の満足感と、地味な記録が残るだけだった。

大学を卒業したのち、峯岸裕也は輸入外車販売会社の金沢支店に現地採用の形で就職した。

彼は現在の自分を挫折した青年として感じていた。百七十八センチ、六十七キロの引き緊(しま)った肉体と、車を手足のように扱う技術と、危険な霧の林道を動物的な勘と大胆さを頼

りにふっとばす闘志と、それらのすべてが生活のための日々に埋没してゆく。そして歳月の過ぎゆくまま、いつのまにか猫背の気むずかしい老人になってしまう。

うまく行って地方の支店長どまりの自分の将来が、彼にはおよそ見当がついていたのである。彼は酒を飲むことをおぼえ、幾人かの酒場の女や、OLや、女子学生らと欲望だけの交渉を持った。

滝村総業のオーナーの一人娘である奈見子と出会ったのは、そんな暮しの中でだった。彼はその驕慢(きょうまん)な少女の目の奥に、自分と共通の饐(す)えた虚無のブラックホールを見たと思った。

注文したローバーが到着したとき、彼は奈見子に車の扱い方を教えるという名目で、黒部ダムまでの山岳ドライブを提案した。彼の申し出に奈見子は探るような目を向けたまま、黙ってうなずいただけだった。

そのドライブの途中、霧の湧く断崖の端に車をとめて、裕也は無言で彼女を抱いた。奈見子は彼に逆(さか)らわなかった。

〈おれはきみと結婚したいんだ〉

と、彼は帰りの車の中で言った。

〈どうせ冗談としか受けとられないだろうけど〉

〈考えとく〉

奈見子はそう応じただけだった。

その時から、ふたりは週に一度くらいの割りで逢い、郊外のモーテルで会話のないからだだけの交りをくり返してきた。

父親にあなたのことを話した、と奈見子が言ったのは、半年ほど前のことだった。

〈そのとき親父さんは何て言った？〉

〈そいつはおまえよりも、滝村総業のほうを欲しがってるんだろう、って〉

〈さすがだな。で、どう答えたんだい〉

〈そのようね、って〉

〈そしたら？〉

〈おれも若い頃はそうだった、って笑ってたわ〉

〈なるほど〉

相当な男だ、という気がした。そうでなくては、一代であれだけの王国を築きあげることは不可能だろう。

「さっきの人のことだけど――」

煙草を灰皿にもみ消しながら奈見子が言った。

「さっきのって？」
「広坂の通りの信号待ちでとまってたとき、あなたが見とれてた女のことよ」
「ああ、あれか」
裕也はあいまいにうなずいた。彼の頭の奥に、スローモーションの画面のようにゆっくりとフロントグラスの前を横切っていった和服姿の女の像がうかびあがってきた。すると彼はふたたび夢を見ているような感じをおぼえた。
「あなたのあの時の目つきは、ただごとじゃなかったわ。あんな目でわたしを見たことなんて一度もないもの。図星でしょう」
「うん」
「あなたはおんなを見ていたのよ」
と、奈見子は言った。彼女は、おんな、という言葉に、アクセントをつけて、あの時あなたはおんなを見ていたんだわ、とくり返した。
「そうかもしれない。それで気分を悪くしたのかい？」
「失礼ね」
奈見子は左右の手を組み合わせて、指を一本ずつ鳴らした。乾いた小さな音が、彼女の心の硬さを伝えるようにきこえた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c